

文字と書の話（2・3・17）

綾村 勝次（昭3・文甲）

本日は大相撲では、千代の富士が千回勝ちという大記録を樹立するという記念すべき日にあたるそうですが、それにかかわりなく大勢お集まりいただきありがとうございます。

私は今ここにじいっと座っております、何を思いついたかといいますが、大正の終り頃には、この会館の一階の所は、御詠歌をあげていたところでした。丁度、交番所の西の裏のところ、御詠歌をあげていました。染殿地藏さんがおまつりしてあったのです。その後のことでありますが、この二階へは、ほとんど毎晩飲みに通った「菊水」というバーがありました。ここに座っております間、そのほか、昔のことばかり想い出されて、なつかしい限りでした。まさに懐旧の情うたた切なるものがありました。しかし今日はウンと古くさいお話しをいたすことになっております。日本人は高年になりますと、いろいろと趣味にいきようと思いますが、書道などやっておりますと、隣近所に迷惑がかかりません。碁や将棋も結構ですが、相手を求めねばなりま

せん。その点、書道では、自分一人で王羲之や空海の書に親しめるのです。

古今の名人や能筆の書を見て、自分勝手な解釈をしたり、その筆意をくみ取ったり、また自分の腰折の和歌、俳句果ては漢詩なんかを、筆をとるにまかせて書くのです。これは高年層の退屈しのぎにいかがかと思つて、書の話をしたそうと思つたものです。

私が書の道へはいつたのは、考えてみますと、実は三高にはいつたせいのようにも思えます。

三高で応援団に中学の先輩がおりまして、後に龍村平蔵を襲名した人ですが、当時はケン（謙）という先輩がいて、応援団に勧誘されましたが、色々の行事があるときには、檄文を作って、模造紙の全紙に、四枚、五枚と書かされました。それに弁論部にはいつていたものですから、長い垂らしに演題や氏名を書くこともありました。正しく大きな字で、書くようになる因縁があつたようでありました。

ちょうど大正の末ころのことです。熊野神社の前に夜店が出たものでした。その夜店を見てあるいていると、古本の店がありました。中に歐陽詢九成宮醴泉銘と表題のあるのをとりあげたのです。上海の文明書局から出た薄い古本です。大正十五年のことでした。

たしか二十銭か、十五銭くらいで求めました。家へ帰つて、これを見てみると、支那の字が、どうも日本の字と違つていて痛感したのです。私たちの、あのころの手本といえば、日高秩父とか、香川松石、長三洲らの書いた文部省撰定の、タテの細長い習字手本でした。話は逸れ

ますが、この日高秩父の御令息は、第四郎といって、京大の哲学の出身で、三高の学生課長として来ておられたようで、私はそのころは、もう大学生で、日高先生には一度もお話をうかがったことはなかったのです。話のついでにもう一人、書に関係の深い方は、ドイツ語の成瀬清先生です。号を無極と称しておられたが、その父君が成瀬大域という書の大家でした。年少にして明治大帝の御前揮毫をされたほどの能書家でした。父は大域、その子息は無極というわけです。しかし私は成瀬先生からも薫陶をうけずじまいで、自分一人で欧陽詢の九成宮を勉強していたわけです。そして今までの学校で習った書とは、どこか違うのであります。今日は、その楷書の筆法についてお話しします。

楷書の筆法には、基本になるのが、三つ考えられます。一には欧陽詢の筆法、二には顔真卿の筆法、三には智永の筆法であります。

第一の欧陽詢の筆法は、すべて少しそり身になって、左右から迫ってくるように書きます。この筆法は隸書から来ているものです。

第二の顔真卿の筆法は、これは篆書の筆法から出て来たもので、欧書は左右からそって来るのに反して、左右外へ円味をおびてそっています。したがって欧法と顔法とは、全く反対の筆法になるわけです。

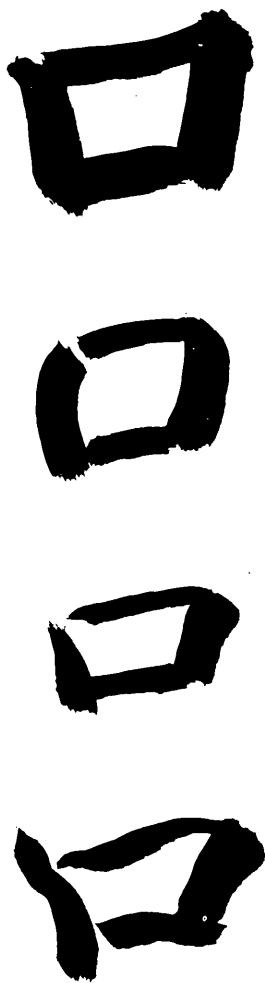
第三は楮智永の筆法でありまして、智永の書なんかが代表的なもので、外にもそらず、内にもそ

欧法

類法

智永

福法



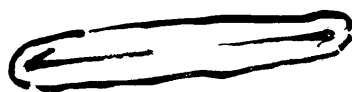
らず、その中間を行く筆法です。

この外には、この三種の筆法をたくみに組みあわせて、造りあげる筆法があるわけですが、これらの筆法を書く者の好みによって、適当にえらぶことになるのです。結局は、自分の心性に適した筆法を、自分の意に任せて自分の書を作ればよろしいわけです。

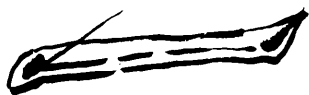
蘇東坡の申すように、楷書は立つが如く、行書は歩むが如く、草書は走るが如し、というように、書道の勉強には、先ずしっかりと立つことを勉めねばなりません。しっかりと立つことを学べば、次に大地をふまえて歩くことも、足に力をいれて走り出すことも学べるわけでしょう。そ

れにしても、上にのべた三種の筆法とその応用は、各自の好みによるものであり、その筆法の上に、肥、瘦などの変化も大きく、運筆の遅速の差異なども、書者にまかせるより他ありません。けれども始めに筆法をきめることにより、王羲之の流にもなり、顔真卿の書流にもなるのですから、やはり初めが肝腎でしょう。

ところで、このような筆法の相違は、どこから来るのでしょうか。それには、それなりの原因



篆筆法



隸筆法



楷筆法

があるわけですが。第一の欧陽詢の筆法ですが、これは前の時代に流行していた筆法が変ったものです。その筆法は八分というものです。この八分という書風もその前の時代に流行していた隸書という筆法の変ってきたものです。隸書と八分の差異といえば、隸書では終筆のところは止まっていますが、八分では終筆のところは、軽く筆をはねてあります。隸書では、そこがしっかりと止めてあるのですが、八分では、次に書く文字の始筆につづく筆意があらわれているのです。隸書では一字一字をしっかりと書きおさめるのですが、八分では、次に書く文字への筆意が出ているのです。つまり筆毛の先がキレイにまとめられているためでしょう。これは製筆法の進歩によるか、筆毛の種類によるのか、いずれにしても、筆そのものも改良されてきたからでしょうし、次に書く字のことを念頭にいれて書いていることが察せられます。

筆は秦の始皇帝のとき、蒙恬という將軍が製筆法を改良して、竹の軸に中山の兔毛を用いて造るようになったと文献にもなっていますが、その時代の現物は現在ありません。少し時代が下ります。蒙恬將軍は精兵十万をひきいて、北方の匈奴を攻略した大功績のある人でありましたし、匈奴に備えて万里の長城を増築した人でありましたが、太子が謀殺されたときに毒をのんで殉死したほどの忠臣でありましたが、宦官の讒にあつて抹殺されたのは惜しいことです。この時代に丞相の李斯がおり、始皇帝の命により、各国で流行していた文字を整理して、小篆という字体を創つて、文字の大改良をおこなったのですが、蒙恬の製筆と李斯の小篆創製と相まって秦の文化

は大いに進んだのであります。この二人共に宦官のために殺されております。また、それまでは竹を編んだものや、帛に字をかいたりしたのであったが、後漢の和帝のころには、蔡倫という人が、麻の木皮やぼろ網などから、新しい紙を發明したが、あたかも当時、許慎の書いた「説文解字」の中に具体的に製法まで記しているので、製紙法を知ることが出来ますが、このように紙が新たに製造され、したがってそれに書写する筆も一段と改良がほどこされたので、終筆のハネもたやすく出来るようになり、隸書がさらに書写するのに便利になって、八分という書体が出来てきたのであります。文字の改良書写道具の進歩と相俟って、書道は大いにさかんになりました。書道の盛行は、書写がますます容易になって、書写に便利になっていったのであります。隸書は廻り道をしたのであります。欧陽詢は、このような隸書、八分の系統からあみ出された楷書であります。

第二の楷書の筆法といえは、顔真卿の筆法であります。この筆法は、その家柄が大いに関係があります。といふのは顔真卿の家柄といえは、古くから篆籀の家と称せられた学問の家であつて、顔回からはじまり顔子推とか顔子固らと綿々と続いた名流であり、篆籀の家といわれるように、文字については中々きびしいのであり、中でも顔真卿は「于禄字書」といふ楷書の正、通、俗字を区別した書物を著わしております。禄を于（もと）めるための字書ですから、官吏登用試験に必要な文字、つまり当時の標準字を明らかにしたほどの知識をもった人でしたから、彼の楷書は

当時の手本となつたものでしょう。その筆法は、欧書のように隷書から出たものでなくして、さらに昔の時代、その家柄のあらわしているように篆書の筆法から出て来ているのです。篆書と隷書には、一見して相違が見わけられるように、いまだかつてなかつたような体質をもって表われました。すべての筆法は、藏鋒といつて筆毛の勢を外へ出さずに、内におさめた円満な味わいをもつた、隷書にくらべると豊肥で沈着な風をあらわしております。とくに之繞の筆意や趯法の筆のあつかい、波法などにはおどろくほどの技巧を用いねばなりません。隷書のすんなりとした筆法と異なつて、篆書の鈍重な重みと力強さをあらわす楷書をはじめました。

私事でおそれ入りますが、三高時代には、やせていたせいでしょうか、欧陽詢の楷書にひどくあこがれておりましたが、あの鋭い筆法、左右せまっている形体、とくにはねる終筆などは、心のふるえるほどに好きでありました。それが年をとつてくると、かえつてそれにおちつかなくなつて、顔真卿の楷書に引きつけられてきたものです。しかも彼の筆法でかいた行書や草書などは、その筆の勢などは夢に見るくらいでした。碁の好きな方は、夢に碁盤に黑白の石を見て、セキとかコウとかが忘れられないように、顔真卿の有名な争坐位帖とか祭姪稿など、まして斐将軍詩巻という顔真卿としては、特異な破体を用いた書などは、随分臨書してまねたものでした。けれどもそれも高齢になるにしたがつてようやく平静にもどると申しますか、右にもそらず、左にも走らず、且々として中庸の道を行くようになりました。この書風は智永の書法であります。王羲之

の直系をくみ、その子孫に当り、永欣寺に住した僧でありまして、この人の書いた千字文の書好むようになりました。千字文という書物は、わが国の歴史には、必ず早くから出てくるものがあります。紀記に出てくる千字文は、この千字文ではないのであります。論語十卷、千字文一卷を百済の王仁吉師が持って来たものは、現存するものとは時代が合いません。この千字文は、梁の周興嗣が次韻したと明らかでありますから、武帝のころのもので、明らかに紀記のものではありません。

けれども人間は、仲々一筋縄にはまいりません。こんな中庸の道をすすむ楷書で満足されるものではありません。いままで申しました筆法を、いろいろと組み合わせて楷書がかけないものではないでしょうか。右にゆき、左へむき、はねたり、とんだりするような楷書がかけないものではないでしょうか。この疑問にこたえるものが、やはり出来ています。初唐の褚遂良の雁塔聖教序の書であります。この書法は、変化を極めております。

わが国でも徳川時代末期に出た貫名崧翁という人で、頼山陽と同時代の人です。この人の書いた山田公雪冤碑はこの書風をまねております。

以上申しあげましたように、楷書の種類と、それについての書法は、大体つくしたとおもいますが、この他に六朝碑などというものがあります。中国の北方の地とか、南方の低い文化の地方に見られる書であります。その根本は欧書のくずれと見れば、大差ないといえましょう。

このように楷書を考えますと、その基礎となりますには遠く篆書や隸書が流行していた時代のことを考えてみる必要があります。これは家蔵の石鼓文の原拓であります。昭和十五年ころに、神戸の古本屋で、七十円位で求めたものでした。最近の東京の古本屋の定価表をみますと、二十五万円の値がついていました。この石鼓文は何時作られたものか、については古来いろいろの説があり、那志良によると、その「石鼓通考」には十一説をあげております。古くは歐陽修は周の文王の時といい、次第に時代が下がり、甚しくは馬定国は北周の文帝の時だといっておりますが、近年では郭沫若は、秦の襄公説を立て、馬衡は秦の穆公説を唱え、唐蘭は秦の靈公説を述べていますように、いまだに決定的な結論が出ておりません。周と秦との国際的関係を追究すると同時に、我々には書体の上から改めて行く必要があります。中国で石に文字を刻したものではありません。古くは石に文字を刻したものは、もつとも古いものとされており、書体も大篆とも、籀文ともいわれ、上古の書体であり、字形であります。この文は「詩経」の中に類似の詩があるところから、貴重なものとされており、現在は北京の故宮博物館に保蔵されております。石鼓文の文字は、周の宣王（B.C 八二七—七八〇）の史官の史籀が手になりとされ、はじめは鳳翔の孔子廟におかれたが、五代のときに失われ、宋に見出され、又鳳翔の府学内に安置されました。今度の大戦の間には、各地を転々としたが、また北京に収蔵されたのであります。また石鼓文の詩は特異な内容をもっており、ここにのべられた祭礼は山や川について伝承された魚を漁る祭礼も早く殷以来伝えられてきたことをのべてあります。

す。これによって始皇帝が李斯に命じて創めた小篆以前の書がうかがわれることであります。しかしこれは碑に刻した文字ではありません。碑というのは、漢の時代になって、平板な形の石に刻して建てたものですし、秦の始皇帝が李斯に命じて石に刻した文字は、史記では、まだ碑とはいわず、石を建つと記してあります。つまり刻石でありますし、石鼓文のような形の石に刻したものは碣とっております。碑とは漢から刻石を呼んだものであります。この石鼓文の文字を、

石

石
石

石

石
鼓
文

つくづく見ておきますと、先秦時代という太古の時代に、いわば未開の時代に近い大昔に、どうしてこんな複雑な、しかも奇怪な字形が造形されたのでしょうか。文字はすべて象形から出発しているといえます。われわれは、文字というものは、人と人との心の交流に役立つ手段である、と聞いておりました。人と人との間の交流の手段であるならば、どんな文字の形式が必要でしょうか。などともっとも初歩的な疑問をいざくことでしよう。

文字創成の問題を考えてみましょう。「淮南子」という書物の中には、「文字が造られたとき、天から粟の雨が降り、鬼は夜になると哭した」といつております。人間同志の問題ではありません。天と鬼が出てきます。人間同志の問題でありますれば、もっと軽便で、相互に理解し易いものになるべきです。ところが石鼓文の字形をみますと、全くその反対の傾向を示しておるのです。これは人間同志の心の会話ではなさそうです。この荘重な、堂々たる形は何が原因だろうか。これにしても余りにも仰々しすぎる表現ではなからうか。五穀の収穫が少ないときには、天が人間をあわれんで粟の雨をふらせて、恵んでくれるし、夜になると読めも出来ない斬奇な文字に苦しんで鬼が大声でわめいて悲しむ事を伝えてくれているが、それが必要なことであらうか、などと考えてくると、文字の発明とはなぜ必要だったのでありましょうか。ところで籀文がつけられる以前は、文字というものはどうであつたであらうか。大篆以前の世界に行われていた文字、それは甲骨文であります。亀甲にほりつけられた文字、獣骨の肩胛骨にきざまれた文字即ち甲骨文が

発見されたことです。皆さん御承知の通り、西紀一八八九年に黄河の中流の殷の古都亳の附近の小屯というところで発見されたのですが、はじめは漢方の妙薬にちがいないというので、薬屋が集めて売り出しました。「龍骨」とよんで、熱病の特効薬として売り出した。理髮屋の李咸がそれを商った。小売では龍骨を刀尖薬という粉末にひいて売ったものです。そのころ北京を旅行していた劉鉄雲（名は鄂）が王懿榮の食客となりました。劉が王家の家人がマラリヤ熱にかかった折、医者の方箋のなかにあった敗龜殻を見つけた。そこに龜甲に文字を見出したのでありました。彼はそれを取り出し、王に見せたところ、説文学者で青銅器の銘文の研究者であった王は古文であるとみとめ、その龜殻が何かの古物にちがいないと感じ、二人でこの敗龜殻をすべて買い求めた。このようにして集められたが、一九〇〇年におこった義和団事件に、当時国子監祭酒であった王は責任を感じて、入水自殺したという悲惨な事件がおこりました。その後は集めた大部分は劉鉄雲の所有になり、その中から手拓して公にしたのが鉄雲藏龜という書物であります。王は行年ようやく四十歳になった働き盛りでした。

それについて想い出すのは、李斯のことです。秦の始皇帝のため新文字をつくり、小篆を造った丞相であった彼が、宦官趙高のために勢力争いの犠牲となり、その息子と共に極刑に処せられ、都咸陽の市で腰斬にあい、その三族が誅滅されています。文字を研究し、詩を詠み、書に親しんでいたと思われる学者、文人、政治家にしてもこんな悲惨な生涯を送っているとは、人生のほか

なき、無慈悲さ、慘酷さには、ただただあきれ驚かされるばかりです。史記の著者司馬遷にしても、宮刑にあい辜丸を失った人であり、唐の顔真卿にいたっては、あのような円満な書風で柔らかな筆法の創造者ですが、安祿山の乱に義兵をあげた大忠臣であり、逆臣李希烈のために一室に幽閉され、やがて殺されました。七十七歳でした。しかも皮肉なことに彼が殺された翌年には李希烈自身もその部下によって殺されております。この乱がおさまった後、顔真卿の遺骸は長安へ送られ、彼の祖先の墓に合葬されたのです。

私らの青少年時代には、秦の始皇帝というと、支那古代の大王ではありましたが、政治・制度の大改革をなし、孔子の国周を滅亡せしめ、秦の野蛮な風習に生き、儒者を穴埋めにし、書籍を焚き尽し、人民の苦しみを顧ずに大工事を起し、阿房宮をつくり、長城を造った等の悪い面をあげて、然も二世・三世にいたって国が亡びた悪王の代表みたいなように印象づけられたものでしたが、今日の中国では、旧来の政治を改め、新しい郡県制度を確立し、在来の各国各様の文字を廃して、改良文字を制定し、大工事を減じて、利便を増し、北方匈奴を平定して、長城を造って、民心を静安にし、蒙恬等に毛筆を改良せしめて書写に便ならしめた等の画期的な大改革を遂行した大帝として、政治改革の古来の第一人者として称揚しております。

おもえば、彼は徐福をして東海に派して、仙薬を求めしめたことも、始皇帝の東方経略と見なされるし、蒙恬の北方匈奴の攻略と合わせ、南方には南海、桂林、象郡、閩中の四郡を設置して

おります。まさに大東亜共栄圏の大志を抱いていたといえましょう。かの万里長城の構築は、春秋時代に始まり、戦国時代には齊、楚、燕、趙、魏、中山、秦の諸国が前後して構築して、辺防に備え、始皇は蒙恬に命じて、長城を修築せしめたものであります。とにかく今日の眼でみれば、始皇は古代の大改革政治家と仰がれております。

中国では文化大革命といって、文化人であっても、なかなか安穏な生活は難しく、文化はもともとウンター・グルントとして骨太い政治が横たわっているからでしょう。とかく筆をもつものには、生活が直結しているのです。古い時代から、筆法を説明するのに、軍事上の用語で説明しています。たとえば王右軍が師匠の衛夫人の筆陣図という文の後に題したと伝える文によりますと、紙は陣にたとえると、筆は刀稍になり、墨は鎧甲にあたり、水をいれる硯は城をとりまく池のようなものだ。心意は將軍にあたり、書の本領は副將軍にあたる、書の結構は謀略そのままだし、筆をとりあげるときに吉凶がひそんでいるのであるし、筆の出入は号令によるし、屈折は殺戮そのものである、というように、筆を使う気持ちや心構えまでを説明しています。この論は、正否はとにかく、誰の考えとも言えませんが、少なくとも筆を執って紙に臨むときは、決死の心をもって勝負することを裏書きしております。遊びではない、よい加減の気持では筆をとれない。筆をとるからには、自分が出るのであるから、真剣勝負にひとしいと、昔から思うていたことは明らかでしょう。この衛夫人という人は王羲之の年少のときの書の師匠であります。

さてこの筆についてであります。私にとっては実にイヤな思い出話があります。話はこうです。昭和のはじめ頃、寺町通丸太町下ったところに、西側に彙文堂と内藤湖南先生の筆になる大きな看板の出ている漢籍の店がありました。そこで見付けた本のうちで「漢字の起源と支那古代の文化」という小冊子でした。高田竹山翁の講演を毎日新聞で編集して、「毎日叢書」第六番として出たものでした。竹山翁といえば、名は忠周、旧幕臣であつて、多年にわたり印刷局の貴重文字を担当し、そのころの紙幣の文字は、みなこの人の書いたもので、著書百数十巻にのほり、中でも「朝陽字鑑」三十六巻は印刷局所用の文字の標準を示すものとされていたし、「古籀篇」百巻、附属二十余巻の大著述は、三十五年の長歲月を要した労作で、稿をあらためること四回にわたり、皆自筆をもつて書いたもので、大正八年には帝国学士院賞を受けたもので、江戸時代から連綿とつづいている説文会（狩谷掖齋から伝えられた会）の常任講師として令名高い人であるから、中学を出たばかりの若僧には、黄金やダイヤのごとく輝いて見えたもので、その本のスミからスミまで、何遍よみかえたことか。その本の十頁のところに、これが書いてありました。

その説明によると、これが殷周時代の「筆」の字である。上図は筆頭に墨汁を含ませた形で、下図は未だ墨汁を含ませない形で、毛が披散しているのに象つてある。とありました。竹山説は、必ず間違いないことと長く信じていたのです。それが、全く誤りであることに気付いたのです。それは、フランク・H・チャルファントの「中国原始文字考」をやはり、彙文堂で求め

上図、刀、右手が持つ



下図、毛筆の持形



たのです。それによりますと、この「中国の古代文字の研究」は、ピッツバーグのカーネギー博物館の紀要第V巻（一九〇六一一九〇七）に英文で発表されたもので、その中に先の尖った小さな鉄のような刃物の絵がありました。この絵は、はじめて見た絵でありました。その説明によると、その鉄の先の尖った先で、亀甲や獣骨に文字を刻したことを知ったのです。硬い角質の物に、毛筆で文字が刻されましようか。チャルファイト師の示した小刃の先が必要だと知り、上図は墨汁を含ませた図ではなく、先の尖ったナイフを持っている図であることを知りました。竹山説は不可でありました。

ああ、竹山ほどの人物でも、あんな誤りをおかすのかと、寒心いたしました。

先きほど、皆さんが「紅萌ゆる」を唱われたのを聞いていて、想い出したのでありますが、私

はあの歌の一番だけを、扇面に書いたことがありました。三高創立百年記念の際、井上松月堂主人からの依頼でした。松月堂主人は清兄と言つて、古くからの友人でしたから、簡単に引きうけたのです。さて筆を執つて、「逍遙の歌」の第一節を書いてみて、おどろいた。第一節の歌詞のなかに、「花」字が二ヶ所もあるのです。あの歌の作者は、三高の大先輩であり、京都帝大の美学の先生でもあり、土井晩翠とならぶ高名の大詩人であります。あんな大先生が、自作の中に、春、夏、秋、冬とよみこむべきに、第一節だけ、春はなくして、花の字を二度も用いているのですから、気にかかり、古い文献をしらべてみると、思った通り、「都の花」ではなくして「都の春」となつておりました。大声で唱うのは、その場限りですが、扇面でも書いたものは、のこるでしょう。ましてあの記念すべき百年祭の扇面です。私は「都の春にうそぶけば」と書いたのです。春にうそぶくは理解できませんが、「花にうそぶく」とは、どんなものですか。沢村胡夷大先輩の意を尊重して、花を春にかきかえておきました。これは「筆」を持った因縁がみちびいてくれたのでしょうか。

中国では、「一字の師」という諺句があります。その出典は、諸説ありますが、一字を教えてもらったために、その詩が美事なものになったことの例であります。それについて、私自身も素姓を明らかにせなければならぬ破目になりました恐縮ですが、私は経済学部の卒業生です。そのころ経済史に興味をもち、それが経とは何か、済とは何かなどと考えているうちに文字にだんだ

ん惹かれて行きました。それが漢字そのもののルーツにつながって行きました。そして中国史をやりたくなり、ついには古代史に興味をもち、経済学部を卒業後は、文字学をやりたくなり、支那文学、支那語学という学部に入ったのです。同期生は四人だけでした。時の指導の先生は倉石武四郎助教授でありました。この方は東方文化研究所の所長狩野直喜先生が、東京から引き抜いてこられた方で、あのころは台湾ポーズの頭でした。当時、京大の大学構内を支那服三人が歩いておられました。一人は三高の大先輩の吉川幸次郎講師、一人は支那語の傅芸子講師、そして台湾ポーズの頭の倉石先生の三人でした。狩野先生の推薦された倉石先生ですから、私は全く傾倒していたのです。その倉石先生が岩波書店から「支那語を学ぶ者のために」という書物を出されました。この書物の中に、寒山寺の詩のことが書いてありました。それをよみますと、平安書道会の月例会の席上、副会長の長尾雨山氏が漢詩に関して啓蒙的な話をしておられたのを、青山浣華（本名清）君がノートをしたものを、そのまま引用したことが書いてありました。青山君は平安書道会での私の親友でありましたし、長尾先生の講義ならば、忠実にノートしたにちがいないのです。大意を申しますと、副島種臣（号蒼海）が支那の要人達と、寒山寺へ観光に行き、そこで即席で詩をよもうかと話もち上りました。然し支那の要人たちも天下の名勝で詩をつくらんとすると、直ぐ頭に浮かぶのは、張継の詩でありましょう。中々一句が出来ません。ところがその時、蒼海が筆をとって書き出したのです。どんな詩が出来るのかと、一同みておりますと、

月落烏啼霜滿天

と書き出したので、一同、張繼の詩をかくのかと思っていたが、結句にいたり、

復鐘聲無到客船

とかいたため、一同大いに感歎した。

という話で、第四句にいたり、古今の相違があつて趣きが深いと、雨山翁が話されたことを、私は今もおぼえています。

それをきいていた私は、昭和三年ごろ、日本文学の円本の中に、日本詩集編というのがあり、蒼海の詩をおぼえていましたので、青山ノートは間違っていることに気付いていたのです。青山ノートの誤りをそのまま引用された倉石先生ともあろう人が、と全く失望しました。参考までにその全詩をあげると第一句は同じですが、第二句はすっかり変っています。

楓橋夜泊
輒蕭然

兵才破却寒山寺

無復鐘聲到客船

これでは相当に違います。雨山翁は入門的に話され、原稿なしで思いつくまま話しておられたのを、青山ノートをかかって、岩波書店から堂々と出版されたのですから、罪は大きい。

これを当時の支那文学学生で、しかも卒論をまとめようとしていたとき、「千字文研究」をテ

ーマにしたものであったが、こんな先生に卒論をみてもらうのはやめだと思い、その原稿をみんな焼却してしまい、卒論を出さなかったために、中退になってしまったのです。

しかしどんな因縁でしょうか、あれからは文字とのくされ縁は切れず、いまだに独学で書の道にいそしんでいます。まあ一人くらい、三高から字書きが出てもよろしかろう。長時間にわたり、私のとりとめもない話に、御清聴下されありがとうございます。

(平安書道会会長)